下町のカスタムショップ〝J・D・S〟

'70年代も終わりに近づき'80年代に入ろうという時、サンフランシスコベイエリアのエルカミーノという道沿いに数多くのハーレーカスタムショップが並んだ。日本でもバイクの街上野で働く2人の青年が、隣り町入谷にハーレーダビッドソンのカスタムショップを作った。「ジャパン・ドラッグ・サービス」である。

当時、カスタムといってもパーツも少なく、ちょっとしたものでも高価で目が飛び出るほどであった。知り合いのパーツ屋にワイヤー一本の値段を聞いたところ、ハーレーの部品ということでアメリカの値段に比べてあまりにも高価であることに腹を立てた小川氏は、友人の吉田氏とそれなら自分たちで店を作って、カスタムをもっと身近なものにしようと思い、店を作ったという。

「毎日が工夫でしたヨ。カスタムと言ったって、アメリカのバイク雑誌の写真を見てこうすればいいとか、これではダメだという繰り返しでした。その頃はどこもそうだったと思いますが、カスタムのデータがないからとにかくいろいろと自分のバイクでやってみて、予測できなかったトラブルにまた勉強させてもらうといった時代だったんです。フレームからアクセサリーまで、自分でやるしかない。手に入らない物は作るしかない……毎日これをどうしたらいいかということの、連続でしたヨ」

「客のなかにはヤマハのXJというインラインフォーのバイクで、どうしてもチョッパーを創るんだと言い切る人もいて、エンジンを除いて全部作りましたよ。冗談みたいなバイクを本気で作ろうとしている姿に負けて、なんとか作り上げました。たとえばファットボブタンクを作るといったって、4気筒を抱えてるヘンテコなフレームに合わせるんだから、近所の名人芸のおっさんに叩きこんでもらったりして。何もかもが新鮮でしたネ」

「あの頃から始まったんでしょうネ、FXオーナーズクラブは。バイクばっかりいじっていたから走りたくて、走りたくて。仲のいいお客たちと始めたんですよ。でもツーリングの度に、仲間のために積む荷物の多さにやんなっていつのまにかグループで走らなくなりましたネ……」

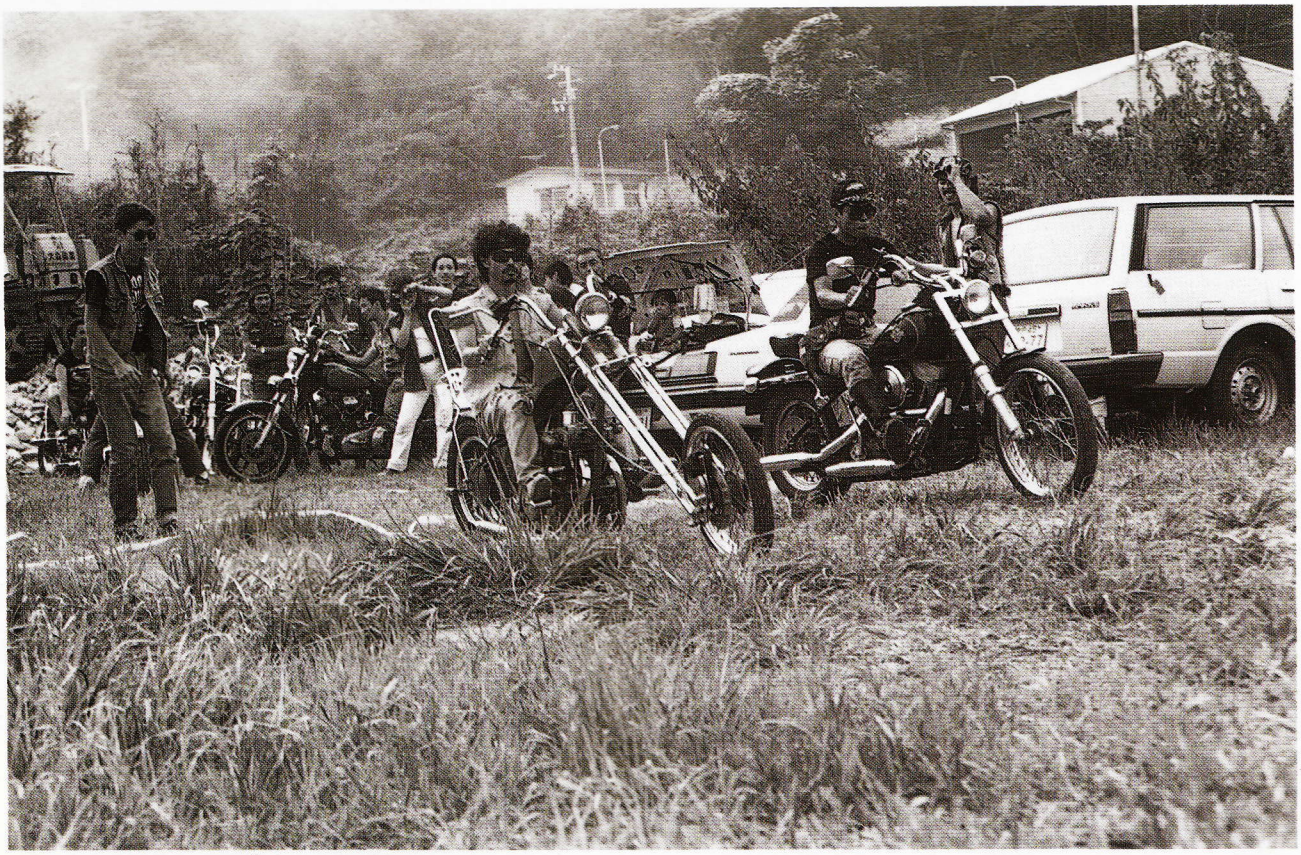
なんとなくさびしげに語る小川氏だが、当時の決意と想いは今も生き続けている。

小川泰良　Yasuyoshi Ogawa '80年J・D・Sをオープン。現在は川越市でジャパンドラッグカスタムサイクルスを経営。

当時の雑誌広告。若者たちはこれを見てJ・D・Sを訪れ、そして育っていった。

ジャパン　ドラッグ　サービス。

BIKER'S SCENE IN 80's JAPAN　俺たちの'80年代



トイラン／チョッパーズミーティング。